オプス・デイへの召 し出し

ここに紹介する小論は、オプ ス・デイへの召し出しを考え ている人やその家族の人た ち、あるいは、深く召し出し について知りたいと望んでい る人々にお役に立つものと思 います。著者のジョン・F・ カバデイル(John F. Coverdale) は、セトン・ ホール法科大学院(Seton Hall Law School) の教授 で、オプス・デイに所属する カトリック信者です。なお、 この小論は1994年に発表され ました。原文で「福者ホセマ

リア」となっていた個所は 「聖ホセマリア」と改めまし た。

2010/09/07

はじめに

オプス・デイは、カトリック教会の属人区(プレラトゥーラ・ペルソナーリス)です。2002年にヨハネ・パウロ二世によって列聖された聖ホセマリア・エスクリバーが、1928年にスペインで創立しました。オプス・デイは世界の90ヵ国以上に広がり、現在、9万人以上のカトリック信者が所属しています。本部はローマにあります。

オプス・デイへの召し出しによって、人々は何にもまして神を愛し、神のために人々を愛するという特有の道を歩むことになります。オプ

ことで、初めてオプス・デイへの召 し出しが理解できるからです。

第1章 キリスト者の召し出し

洗礼による聖性と使徒職への召し出 し

神は全てのキリスト者に対して聖性 に向かうようにとお呼びかけになり ました。聖性とは何にもまして神を 愛し、神ゆえに人々を愛し、人々に 仕えることです。聖パウロは、エ フェソの初代のキリスト者(鍛冶屋 や店主、家事従業員や料理人、労働 者からなる人々)に、神は「天地創 造の前から、私たちを愛され、ご自 分の前で聖なる者、汚れのない者に しようと| (エフェソ1,4)、キリス トにおいて私たちをお選びになった と保証しています。第二バチカン公 会議で、「どのような身分と地位に あっても、全てのキリスト者がキリ スト教的生活の完成と完全な愛に至 るように召されている| (バチカン

公会議、『教会憲章』40)と述べられたとき、この真理を私たちに思い出させてくれました。

社会における聖性と使徒職への召し 出し

ヘアドレッサーや各種の作業員、会計士や主婦たちは、神と人々を愛し、神に仕え、友人や家族、同僚や 隣人にキリストのメッセージを広め

ることに、献身的な努力を傾けるよ う呼ばれているのです。人々はまず 自らの仕事に従事し、家族生活を営 み、余暇を愉しみ、社会生活を送り ながら、自らの生活態度と言葉で証 しするのです。神はキリストの精神 で「この世のもの全てを照らし出 し、秩序づけるために」(『教会憲 章』33参照)、キリスト者全員をお 呼びになっています。だから、キリ ストの教えは教会の中だけではな く、什事場や家庭や社会のあらゆる ところで実行されるのです。 | 仕事 場や人間が努力を傾けるところなら どこでも、普通の信徒は自分の義務 を果たすことによって、パン種のよ うに中から世間を聖化する努力をす るように神から呼ばれています| (『教会憲章』33)。聖ルカによる 福音書が語るイエスに癒された人の ように、普通のカトリック信者は共 に生活し共に働く人々に「神の正義 と愛と慈しみ憐れみを | 知らせる

(ルカ8,39) ためにキリストによっ て派遣されているのです。

信徒は、「この世に住み、世俗の仕 事に携わり」(第二バチカン公会議 『信徒使徒職に関する教令』2)、 キリスト者として生きることで、 「教会の使命の中で特別な欠くこと ができない役目」(同上、1)を果 たすよう招かれています。信徒に とって聖性への普遍的な召し出しと は、世間の真っ只中で日常生活を送 りながら、神を愛し、人々を神に近 づけるように尽力しなさいという呼 びかけです。オプス・デイへの召し 出しは、教会の信徒として、このよ うな生き方に、全力を傾けることに 外なりません。会社や工場や農場、 学校や家庭で信仰に生き、聖性を目 指し、使徒職をするよう神がお呼び になっていることを理解してこそ初 めて、なぜ人々がオプス・デイのメ ンバーとしてこのような生き方に人

生を捧げるのか、その理由を理解することができるでしょう。

個人的な呼びかけ

神は全ての人を聖性と使徒職へとお 招きになるだけではありません。一 人ひとりに具体的な計画を持ってお られます。ご自分が永遠から予見さ れている具体的な役割を、私たち一 人ひとりが果たすことを神はお望み です。イエス・キリストは、福音書 の中で、私たち一人ひとりのための 神の計画は、私たちの生活の細部に まで及ぶことを保証なさいました。 あなた方の髪の毛の一本も残らず数 えられている(マタイ10,30参照)と 言われたのです。聖性と使徒職への 普遍的な召し出しは、各々の人生を 構成する様々な状況全体の中で、 まったく個人的な聖性への召し出し というかたちに表れます。

日常生活の無数の状況の中で、私たちは神の個人的な呼びかけを耳にし

ます。生まれたときから持っている 才能や傾き、まったくの偶然の出会 い、または思いがけないときに心を 打つ考えなどを通して神は私たちを お呼びになるのです。神のご計画 は、私たちの生活の中で起きる状況 と出来事を通して、少しずつ明らか にされます。一人ひとりの人生に は、大抵の場合、職業の選択、結 婚、子どもの誕生などのような大き な転換期がいくつかあります。キリ スト者は、当然このような出来事の 中で神のご計画を知るばかりでな く、聖書を読むとき、秘跡を受ける とき、念祷をするとき、さらに日常 生活を構成している幾千にもわたる 些細な状況においても、神のご計画 を発見します。多くの場合、神が何 か特別な役割を果たすために自分を お呼びになっていると気づくことさ えないかもしれませんが、実はこの ような場合でも、神は人生の日常的 な出来事や状況すべてを包み込む独 自のご計画を持っておられるので す。

神の呼びかけに応えるよう、人生の 方向を決める

神の呼びかけが厳しいという事実 は、その呼びかけが否定的で重荷に なるということを意味するわけでは ありません。ヨハネ・パウロ二世教 皇が書かれたように、「愛に駆り立 てられて"霊の導きに従って歩む"者 (ガラテヤ5.16)、そして他者に仕 えることを望む者は、自由に選び自 由に実行すべきこととして、愛を実 践するという根本的で必要な道を、 神の法の中に見出します。 (…) 恩 恵は神の子の完全な自由をもつこと を可能にし(ローマ8,21参照)、"御 子における子ども"として生き、その 結果、私たちの崇高な召し出しにふ さわしい生き方で道徳生活を送るこ とができるようにしてくださいま す」(ヨハネ・パウロ二世、回勅

『真理の輝き』18)。神の呼びかけに対して寛大に応えることは、天国においてだけでなく、この地上においても幸せになるための鍵です。キリストの跡に従う者は、永遠の命に生きるだけでなく、この世でも百倍の報いを受ける(ルカ18,29-30)と、キリストは約束なさいました。

神は信仰によって変えられた生活に 完全に打ち込んで生きるよう、すべ てのキリスト者をお呼びになってい ます。司祭や修道士になる召命を受 けていない普通のカトリック信者 は、「その根底ではキリスト者とし ての新しさから定義され〔ていま す) | (ヨハネ・パウロ二世、使徒 的勧告『信徒の召命と使命』15)。 神のご計画では、カトリック信徒の 「この世での普通の生活」は、「単 にその外的な枠づけによってだけで なく、イエス・キリストのうちに十 全な意味を見出すように定められて います | (同、15)。神のご計画に よると、「信徒が地においても、世においても、人類共同体においても、人類共同体においても、溶け込んでそれらと全面的にかかわっている」ということは、「救いをもたらす福音を広めることを目的として溶け込み、関わっていくという"新しさ"と独自性を表しているからです」(同上、15)。

「全ての信者は神の救いの計画がど んな時代にも、あらゆる国々のあら ゆる人々にまで届くよう働くべき | (『教会憲章』33)であることを、 全てのカトリック信者は知るべきで す。「自分の毎日の活動を、神との 一致の機会、御旨の到達の機会、 人々への奉什の機会、キリストにお ける神との交わりに人々を導く機会 と見なすよう」(『信徒の召命と使 命』17)、神は信徒である男女をお 呼びになっています。ヨハネ・パウ ロ二世によると、「信徒は聖性への 召し出しに気づき、何よりも拒むこ とのできない義務としてそれを生き

なければなりません」(『信徒の召 命と使命』17)。

一人ひとりに神が語りかけてくださ るこの呼びかけに忠実に応えるとい うことは、私たちの全生活を形作っ てくださる神の計画にすべてをお任 せすることであり、そのご計画にそ ぐわないものはすべて退ける必要が あるということです。結婚において は、このことが容易に理解できま す。結婚生活を成功させたいと望ん でいる人は、実現できそうな他の気 高い計画や野心があっても、結婚が 要求することがらを優先させる心づ もりがなくてはなりません。結婚を 召し出しという点から考えるかどう かにかかわらず、結婚が人生全体を 包み、人生を形作るものであること は、当然のことであり称賛すべきこ とです。妻の健康のために、温かく 乾燥した気候が必要ならば、たとえ 海釣りを最高の楽しみとする夫で あっても、喜んでアリゾナ州に住む 覚悟がなければなりません。学校に通う子どもが数人いる夫婦ならば、 学費を払うために娯楽や休暇を切り 詰め、古い車を続けて使用うのは当 然でしょう。結婚した人が配偶者と 子供たちの正当な必要を満たすため 犠牲を厭うなら、それは明らかに寛 大さの不足と未熟さの兆候です。

同じことが全ての召し出しについて 言えます。神の特別の計画を実行に 移すために、神的な召し出しに忠実 を保つとは、その計画に沿って自分 の生活全体を打ち立てることです。 神の呼びかけに応じるには、人生を 完全に変える必要がある。これは明 らかに福音書に述べられています。 大宴会に招かれた客のたとえで、神 を表す王は招待を断った人々に腹を 立てました。正当なものであると考 えられる仕事や家族の事情があった にも拘らず(ルカ13.16-24参 照) | 、立腹したのです。

キリストはご自分をお招きになった 人々に、その召し出しにそぐわない ことなら何であってもすべて捨て去 るよう要求されます。招きを受けて もぐずぐずとして返事を先延ばしし ようとする二人に、きっぱりとおっ しゃっています。「主は、別の人 に、『私に従いなさい』と言われた が、その人は、『主よ、まず、父を 葬りに行かせて下さい』と言った。 しかしイエスは言われた。『死んで いる者たちに、自分たちの死者を葬 らせなさい。あなたは言って、神の 国を言い広めなさい。』また別の人 も言った。『主よ、あなたに従いま す。しかしまず家族に暇乞いに行か せて下さい。』イエスはその人に、 『鋤に手をかけてから後ろを顧みる 者は、神の国にふさわしくない』と 言われた | (ルカ9.59-62)。 キリスト が二人の願いをお聞き入れにならな かった時の、一見厳しい態度はこの 章句には表れませんが、この二人に は特に重大な理由があったからなの

かもしれません。多分、キリストが 言い訳をお認めにならなかったのは、二人の心をご存じであったから であり、僅かな返事の遅れが重大と であり、値かな返事のよったからな 結果をもたらすことにせよ、神のら さは呼ばれる人の人生全体にすられるものであり、何よりもまずといずればならないものだといす。 させなければならないものだとです。

第2章 オプス・デイの精神

属人区として創立された時、教皇は「精神の一致を備えた組織」(使徒憲章『Ut Sit』序論)と表現されました。この章では、オプス・デイの主な特徴について説明しましょう。

神の子

オプス・デイの精神の土台は、愛すべき父なる神の子であることを生き生きと自覚することです。(ヨハネ1,12とヨハネの第一の手紙3,1参照)

この喜ばしい現実のおかげで、オプ、き、とうでは、神の音が神と接するとなるととをはないでも、神の子である信頼がで生きたいのできまれ、一日のおいのできまがでいる。ないの子といる。なり、自己の子といるがあれば、自己の子とのでは、自己の生きがありた。自時に、自己の生きがありた。と幸せに満たされるのです。

神の子として、神から与えられている自由という賜物をいっそう深く知り、高く評価するようになります。オプス・デイの精神は、「キリスト者が有するこの測り知れない宝、ローまり"神の子らの光栄の自由!(ローマ8,21)"」(ホセマリア・エスクリバー『神の朋友』27)への大きなりで、オプス・デイの信者に繰り返し教えます。創立者は1956年の説教でこう話していました。「私は好ん

で自由という冒険について話します。私たちの一生はまさに自由の織りなす冒険であるからです。重ねて申しますが、奴隷のようにではなく、自由な子として、主のお示しになった道を歩みます。自由で軽快な歩みを神の賜物として味わうのです」(『神の朋友』35)。

日常生活における聖性

オプス・デイの精神の特徴は、日常 生活の聖化を重視することです。

「オプス・デイの目的と精神は、日常の仕事を聖化する点に価値を置いているところにあります。すなわち、仕事を聖化し、仕事において自己を聖化し、仕事を使徒職の道具に変えることです」(『司教省の宣言』1982年8月23日、II、c.)」。

小さな村で大工として働いたキリストの生活が、オプス・デイ信者の生き方を示しています。30年間、キリストは目立たない生活を送りまし

た。キリストは何よりも御父の御旨 を愛し、各瞬間に全精力を傾けてそ の御旨を果たしました。しかし、そ の時代の人々との間に壁を作るよう なことは何ひとつなさいませんでし た。当時の人々と同じ服装をし、同 じような話し方をしておられたので す。人々の関心や興味に関心をもっ ておられました。偶然出会った人に は、イエスは村の一職人であるとし か思えませんでした。最初の30年間 の生活中、親戚や隣人、友人たちが イエスの説教や奇跡を予想できるよ うな振る舞いは見られませんでし た。事実、イエスが奇跡や説教をな さると、村の人々は驚いて、「これ はヨセフの息子イエスではないか。 我々はその父も母も知っている。ど うして今、『私は天から降ってき た』などというのか」(ヨハネ 6.42)と、心の中でつぶやいたので した。

キリストの「私生活」といわれるナ ザレでのご生活は、オプス・デイの メンバーが見習おうと努める手本に なっています。日常生活において神 に至ることが可能であるということ を、自らの生活で証ししようと努め ているのです。オプス・デイの信者 を知っている人なら誰でも、その人 が信仰を真面目に受け取り、信仰を 実践しようと努めていることに気が つくでしょう。メンバーの友人や同 僚に召し出しの事実を知られること に異議を唱えることはありません。 しかし、ナザレでのイエスの生活を 模範として、世間の真っ只中で普通 の日常生活を送るように呼ばれてい るので、自分が神に個人的に献身す るよう召されているということを公 表することは好みません。オプス・ デイの信者の召し出しは、キリスト の隠れた生活のように目立たず静か なものです。それは、父親が自分の 子供の教育に大きな関心を持ち、看 護十が老輪の患者の言うことに耳を

傾けるために立ち止まり、大学生が 難しい数学の問題に苦戦している同 級生を快く手伝い、隣人の家族の問 題をキリスト教的に解決するために 手伝うような態度に表れます。もち ろん、これは善良なキリスト者なら 誰でも実行することです。ここが、 実に重要な点です。すなわち、オプ ス・デイの信者は、神と人々を愛す る心から自分自身を聖化し、出来る だけそのようにすることで他の人々 を聖化するよう努め、神が世間の直 中で生活しているキリスト者全員に 要求なさることを実現させようと努 力するのです。

仕事の聖化

「神が人をお創りになったのは、働かせるためでした(創世記2,15参照)。人間はだれもが働かなくてはなりませんが、オプス・デイ独自の特徴と目的は、ただ働くだけではなく日常の仕事を深く愛するように導

くことです。仕事は際立った人間の尊厳、社会の進歩の進歩の進歩のを入間の尊厳、社手段であるとのであるとなってはなが、それに溢れるではいるが、を仕に溢るではいるが、をはいるではがないであります。日常の仕事のであるといるのではいるのでは、オプストをはいるのでは、オプストの強力にであります。(オプス・ディストン・ディーの対します)。

仕事を聖化するには出来るだけ良く 働く努力が要求されます。見せ掛け だけで欠点だらけの仕事を神に捧げ ることはできないからです。例え ば、聖化を心掛ける医者ならば、 聖化を心掛ける医学の知識を持 ち、患者一人ひとりに必要な配慮を ち、患者一人ひとりに必要な配慮を に努めます。家屋の塗装を仕事にす るオプス・ディの信者なら、最良の技 術を身につけて仕事を注意深くきれいに仕上げ、報酬にふさわしい働きをするよう努力します。

というのも、オプス・デイ属人区の信者は、ただ成功したいから、あるではは、ただ成功したの働くだけであるではなく、特に仕事は自分に対する神のはなく、特に仕事は自分に対するのであるとせ事をがゆえに、ですがあるとも考えるからです。であるとも考えるからです。を異たすため、人々への愛りを果たすため、人と仕事を遣り遂げるのです。

キリスト信者、具体的にオプス・ディの信者にとって、仕事を立派に果たすということは、利己的な仕事の仕方をしないことです。キリスト者は、労働が生み出す収入を含めて仕事の正当な報酬は、神のご意向に沿って賢明に管理されるべきものだと考えます。オプス・ディのメン

バーは、個人的には慎ましく質素な 生活を送っています。責任感の強い 管理人のように、自分の気まぐれを 満足させるために収入を使うのでは なく、家族を支え、使徒職を助け、 社会の重荷を分け合い担うために使 います。

オプス・デイの信者が受ける形成 は、カトリックの社会教説に一致 し、良心を形成していくのに役に立 ちます。オプス・デイは、その信者 とその活動に参加している人たちに 対して、社会で恵まれない人々の状 況を改善しようと努力するにあた り、正義が要求することを敏感に察 知し、度量の大きい寛大な心で事に 当たるよう強く勧めます。その結果 の一つとして、世界中でオプス・デ イの信者が創設し、経営する多くの 社会事業を挙げることができます。 しかし、さらに大切なことは、教会 の社会教説を自らの仕事とその他の

活動において実践するために個々のメンバーが傾ける努力です。

オプス・デイでは、人々への思いや りと秩序、時間厳守、正義と謙遜な ど、多くの徳を実践するための日々 の具体的な方法を提供します。とり わけ、仕事を奉仕に変えることに よって愛徳を示すよう教えます。聖 ホセマリアはこう書いています。 「私は主イエスを愛する心から、 人々に仕え、私の全生涯を人々に仕 える手段に変えたいと思っていま す | (『知識の香』27)。この精神 に導かれて、オプス・デイの信者は 人々に誠実に仕えるために仕事に当 たる努力をしています。列聖手続き が既に始まっているオプス・デイの 信者がすでに十名を越えています が、そのうちの二人を紹介しておき ましょう。一人はイシドロ・ソルサ ノです。彼は鉄道会社で働いていた 土木技師でした。もう一人は17歳の ときに癌で亡くなった女子学生のモ

ンセラート・グラセスです。二人と も仕えることによって愛徳をはっき りと表しました。二人の聖性は際 立った行動の中にではなく、毎日の 様々な状況の中で徳を実践すること にありました。例えば、同僚の話に よると、イシドロは自分の義務では ないにもかかわらず、同僚が必要な ことをうまく遣り遂げることができ るよう、自から進んで喜んで手を差 し伸べて手伝っていたそうです。モ ンセラートは、何ヵ月もの病気の苦 痛を捧げ、祈りと喜びに満ちて聖性 を求め、病に伏す時間を友人たちが 神に近づくために使っていました。

仕事と祈り

仕事とそれに伴う社会との接触は、 心を神に上げて神と話す機会になり ます。オプス・デイの精神に鼓舞さ れて生活する人々は、休憩時間を活 用し、仕事を神に捧げ、助けを求 め、あるいは、神をお愛しています と申し上げる努力をします。この精神を自らの生活に組みの事柄は建た日々の事柄はは一届近さの事柄は見います。仕事と日本の事柄は見います。一日できるようになります。は、これでですがです。するとは全がです。なるののではないです。ないではないがいになるということです。

 一の個人的な付き合いのために捧げられた時間があれば、仕事や休憩、 そして生活のすべてを神を愛する 道、すべて共有する友情に変えるこ とができるのです。

オプス・デイの信者の祈りの生活 は、イエス・キリストに向かいま す。具体的には、御ミサに中心を置 きます。聖ホセマリア・エスクリ バーの言葉によると、御ミサは、オ プス・デイの信者の「内的生活の中 心であり根源しとなります。仕事と 日々の諸活動は御ミサの中で父なる 神にイエス・キリストが捧げられ た"いけにえ"としての意味を十全に 持つようになります。ゆるしの秘跡 も「イエス・キリストを着る」(ガ ラテヤ3,27)機会として、オプス・ デイの信者の霊的生活の中で中心的 役割を果たしています。

マリアの子

神の子としての強い自覚を深め、聖 書と秘跡によってイエス・キリスト と個人的に親しく付き合うことに加 えて、オプス・デイの信者は聖母マ リアへの信心を実行します。聖ホセ マリアは霊的な子ども達に、「子と しての愛と喜びを持って聖母に近づ きなさい」と勧めました。オプス・ デイ創立直後に書いた本の中でこう 言っています。「道の終わりには、 我を忘れてイエスを愛する自分に気 づくことでしょう。しかし、その道 の始まりは、マリアを百パーセント 信頼した愛であるべきです」(ホセ マリア・エスクリバー『聖なるロザ リオ』前書き)。

マリア信心と神の子としての自覚があれば、奉仕の精神が芽生え、人々を助けたいと望むようになります。 マリアについての説教の中で創立者はこう説いています。「マリアに対しては、子どもとして接しながら、自分の問題や個人的なことばかりを 考えるようなことはできないはずで す。聖母と親しく交わっているの に、利己的な事柄のみにたずさわる わけにはいきません。マリアは、私 たちをイエスのもとへと導いてくだ さいますが、そのイエスは"多くの兄 弟の長子"(ローマ8,29) でありま す。従って、イエスを知るとは、 人々のために身を徹して働かなけれ ば私たちの一生も無意味に等しいと いうことを知ることなのです。キリ スト者なら、教会全体のことを考 え、すべての人々の救いのために生 きなければなりませんから、個人的 な問題だけに関わっているわけには いかないはずです| (ホセマリア・ エスクリバー『知識の香』145)。

聖ホセマリア・エスクリバーへの信 心

教皇ヨハネ・パウロ二世は、「何世 紀にも渡り、その生活と言葉であら ゆる異なる歴史の時代を照らした男

女信者の中で、聖ホセマリア・エス クリバーは"卓越した場"を占める | と述べておられます(『オッセルバ トーレ・ロマーノ』1993年10月27 日、英語版、n.43)。教皇ヨハネ・ パウロ二世は、創立者の列福式の翌 日、オプス・デイの信者とその友人 たちに向かって、「聖ホセマリアの 模範と言葉の光に照らされて欲し い」と希望を述べられました。教皇 にとって、ホセマリア・エスクリ バーは、「聖性の模範」であり、 |日々の人間の活動におけるキリス ト的英雄性の卓越した証人」です (『オッセルバトーレ・ロマーノ』 1992年5月17日、p.6)。

教皇が励ましたように、オプス・デ イのメンバーは、聖ホセマリアの書 物の中でオプス・デイの精神を学 び、そして実行するよう努めていま す。さらに大切なことは、創立者の 生き方そのものが、その精神を日々 実行するにはどうすればいいかを示

犠牲の精神

純粋に人間的な面だけを考えても、 自己訓練と自己犠牲が必要です。アスリートたちは厳しいトレーニングを自らに課します。人々は健康のため、あるいはただ単に外見を良くあるために、ダイエットをしますをもらゆる階級の男女は職業面で個人もいるために、あるいは自分の個人的は間標を達成するために、長い時間

を費やしています。聖パウロはコリ ントの初代キリスト者にキリストの 傍らを歩むには自己犠牲が必要であ ることを強調しています。「競技を する人は皆、全てに節制するので す。彼らは朽ちる冠を得るために節 制をするのです。 (…) 私は自分の 体を打ちたたいて服従させます。そ れは、他の人々に宣教しておきなが ら、自分の方が失格者になってしま わないためです」(コリント第一 9.25と27)。犠牲を実行するキリス ト者は、徳に成長し、欲求をコント ロールし、身分上の義務を果たし、 人々への愛徳を実行することができ るようになります。

キリスト者は特にキリストを真似、 その生き方を共にするために犠牲を 喜んで受け入れます。イエスはご自 分の後に続きたい人たちに、自分を 否定して日々の十字架を取るようお 招きになりました(ルカ9,23参 照)。「自分の十字架を担って私に 従わない者は、私にふさわしくない」(マタイ10,39)。オプス・ディの信者の目標は、聖パウロと共に、「生きているのは、もはや私ではきりません。キリストが私の内に生きておられるのです」(ガラテヤ2,20)と言うことができることものとすることを自分のものとすることには、「キリストと共に十字架につけられています」(ガラテヤ2,19)と言うことができなければなりません。

犠牲は私たちをキリストに結びつけるだけでなく、人々をキリストに近づけるためにも役立ちます。なぜ自分たちは悪魔を追い払うことがでスとかったのかと使徒たちがイエスはお教えによる。「悪魔を追い出すには、イリと断食以外に方法はない(マタイ17,20)と。聖パウロは、コロサイの初代の信者にこう教えています。

「今や私は、あなた方のために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを、身をもって満たしています」(コロサイ1,24)。

オプス・デイの精神によれば、各々の職業や仕事、家庭と社会における 義務を出来るだけ完全に果たすため に必要な努力を第一の犠牲と考えま す。仕事と日々の生活の中には継続 性や秩序、時間厳守、困難や逆境を 快く受け入れることなど、自己否定 と犠牲の真の精神を実践する機会が 数多くあるからです。

オプス・デイのメンバーはまた、時に鞭や鎖などキリスト教の伝統的な自己否定の業を実行して、十字架を担いなさいというキリストの招きに寛大に応える努力をします。このようなキリスト教の苦行を実行しても、アスリートたちの鍛練や、健康や体型を良くするために多くの人た

ちが実行するダイエット以上に害を 与えることはありません。いずアとはありません。いずアとはありません。コークで記にわたって聖ドミニョラのサインシスコークでではない。 で聖フランシスコークでではない。 で聖フランスコーマザーを というでではなど、進んでもいりです。 というではないないないないないないないない。 というに実行した犠牲です。

喜んでいてほしい。喜びはあなたの 道の肝要な部分なのだからし

(『道』665)。オプス・デイのセンターを訪ねる人は誰でも、「明るく快活なキリスト信者の家庭」と、そこにいる人々が「平和と喜びにあふれている」(ホセマリア・エスクリバー『鍛』520参照)ことに気づくでしょう。

使徒の心

の間に広げる使命達成のために努めているのです。

オプス・デイの信者は父なる神の愛 を自覚することが平和と幸せの源で あると自覚しています。その平和と 喜びを、人々と分かち合いたいと望 むのは当然です。ですから、友人や 同僚、家族、そして近所の人達を、 神にもっと近づけたいと望んでいる のです。良い模範を示すように努め ることの他に、友だちのために祈 り、犠牲を捧げます。友人との会話 を通して、もっと詳しく深くキリス トを知り、もっと深く愛し、聖性へ の呼びかけに応えるように手助けを します。彼らの励ましの言葉や、直 面している難しい問題のための祈 り、或いは、ふと漏らした忠告など は、深いキリスト教的友情の表れと 言えるでしょう。またあるときに は、キリストの教えやキリスト教的 な生き方に要求されること、あるい はオプス・デイへの召し出しについ

ての心と心の真剣な話し合いとなる ことでしょう。

第3章 オプス・デイへの召し出し

神は聖性を目指すよう、言い換えれば、神と人々への愛を自らの人生を動かす原動力にするよう、すべてのキリスト者をお呼びになるということを見てきました。また、ほとんどの男女には、日々の生活の中で聖性

と使徒職の普遍的な召し出しに応えることを望んでおられることもわかりました。神は私たちが日々の仕事や家族生活、日常生活の中で、またその活動を通して、ご自分と人々への愛を表明するように望んでおられるのです。

オプス・デイへの召し出しは、この 世において聖性を目指し、使徒職を するようにという、キリスト者が受 ける召し出しの中でも特定の召し出 しです。それは、日常生活という平 凡な環境の中で自分自身を聖化する よう神がお望みであることをすべて の人々に知らせることによって、教 会に仕えることです。神は人々をオ プス・デイにお呼びになる際、この 世で聖性を目指すよう召されている という教えを広め、自らも真剣に努 力して聖性を求めるようにお招きに なります。オプス・デイの提供する 内的生活と使徒職に関する形成を活 用して仕事を聖化し、その仕事で自

らを聖化し、また仕事を聖化することによって人々を聖化するための手段に変えるようお望みなのです。 従って、オプス・デイへの召し出しとは、全ての人々に共通する聖化と使徒職への召し出しを、固有の方法で生きるということなのです。

個人的な招き

オプス・デイへの召し出しを発見すると、何にもまして神を愛し、神へ

の愛ゆえに人々を愛せよという招き が、緊急かつ個人的な招きであるこ とに気づきます。ありふれた例かも しれませんが、役に立つかもしれま せん。ある婦人がパーティーに招待 されたとしましょう。ところで、招 待客はみな料理を一品もって行かな ければなりません。その少し後、招 待主が客の家を直接に訪問して、特 別に美味しいシーフード・サラダを 準備して是非パーティに参加して欲 しいと言います。招待状が郵便で送 られてきたとしても、いずれの招待 も内容は同じですが、訪問した上で の招待は具体的であり、本当に参加 してほしいという意向が表れていま す。同じように、オプス・デイへの召 し出しを知ると、イエスが個人的に 「天の御父が完全であるように、あ なたたちも完全になりなさい」(マ タイ5.48)と招いておられることに 気づきます。招きそのものに変わり はありませんが、招きの中身がより いっそう明白かつ具体的となり、更

に個人的な性格をもつようになるのです。

個人的な献身

オプス・デイへの召し出しを受け入 れると、個人的な献身が要求されま す。キリストの招きに応えるオプ ス・デイのメンバーは、オプス・デイ の精神を生きることによって、自ら を聖化し、人々を聖化して、全ての 人が聖性に呼ばれているというメッ セージを広げていくことに全力投球 します。「私はここにいます。主が 私をお呼びになられましたから| (サムエル上3,9)。こう言って神の 招きに応えたサムエルのように、オ プス・デイの人たちは、努めて寛大 に神の招きに応えようとします。各 自の生活の中で、神の御旨を行うた めにすべてを捧げる生き方は、オプ ス・デイの精神に従って生きるため の努力の具体化であり、その生き方 の意義でもあります。献身すると

は、魅力的な良い行いをすること以上に、神の招きに絶えず応えること を固く約束することを意味します。

この招きは、オプス・デイにおいて 指導的責任を担うディレクターが内 的生活と使徒職活動について提供す る具体的なガイダンスのかたちをと ります。オプス・デイのメンバー は、職業と社会的な事柄と政治に関 して完全な自由と自立性を享受しま すが、霊的、使徒職的な分野におい てはオプス・デイが与える形成と霊 的な勧めを自由に受け入れます。神 がこの具体的な方法で仕えるよう、 お呼びになっていると確信している からです。勧めは、いずれも聖書と カトリック教会の聖伝にしっかりと 基づいたものです。それは教会が聖 性を求める人々に提供する勧めです が、各々に固有な状況に合わせて、 その人をよく知り、その人の状況に 深くかかわっている人を通して与え られます。この勧めの内容について

は、第2章のオプス・デイの精神について説明した通りです。

内的変化

オプス・デイへの召し出しは、自ら の聖化ならびに仕事や余暇、社会関 係などを聖化することによって他の 人々を聖化するようにという、個々 の人間への招きですから、それはま ず内的な変化を要求し、その変化は 必然的に態度に表れます。オプス・ デイに所属する信者の生き方は外的 にはほとんど変わりません。オプ ス・デイへの召し出しは、新しく異 なる生活のために日常生活を放棄す ることではなく、むしろ同じ日常生 活を新たな異なった視点を持って営 むということなのです。オプス・デ イに所属する人で二人の子どもをも つ弁護士なら、今までと同じ事務所 で什事を続け、所属する前と同じ家 に住み、同じ服を着用し、同じバス ケットボールのリーグでプレーをし

ます。しかし、何かが変わります。 御ミサに与るために、平日の朝少し 早目に起きたり、子どもと一緒に遊 び、子どもの寝支度をするのを手伝 うために、什事場では時間を上手に 使う努力を以前にもまして工夫する ようになるでしょう。そして、夕方 や週末には、もっと深く信仰とオプ ス・デイの精神について学ぶための 時間を見つける努力を傾け、友人や 仕事の同僚たちにもっと深い関心を 持つようになるでしょう。家庭で は、妻に対してもっと細やかな心遣 いと深い愛情を持って接し、さらに 深く子育てに関わるよう努力しま す。仕事と家族生活、祈りと娯楽を 神が計画に組み込まれているもの、 自らの聖化と人々の聖化のために神 が準備された手段であることを理解 するようになるのです。

同様に、オプス・デイに所属し、経 営学の学位を取得するために勉強し ている若い女性なら、以前と同じく 授業に出席し、同じアルバイトを続 け、同じクラブに所属し続けます。 しかし、授業を神が要求なさること の重要な部分であると考えるはずで す。同級生には以前にもまして深い 関心を持ち、彼らを助けるように努 めるでしょう。また、無償で炊き出 しの手伝いをし、時々養護施設を訪 問したりすることでしょう。カヌー に興味を持つようになった仲間が夏 にカヌーで長期旅行を計画するのと 同様に、オプス・デイに所属する学 生はさらに深く教会の教えとオプ ス・デイの精神を学ぶために研修会 に参加できるよう、自分の予定をや り繰りすることでしょう。彼女の生 活の外面的な変化は比較的わずかで しょうが、新たな内的な態度はその 行動のすべてに新しい意味を与える のです。

多様なメンバー

神は、オプス・デイの信者すべてに 同じ召し出しをお与えになります。 仕事と家族生活、日常生活と他のす べてを聖化するよう、またその活動 を通して自分自身と人々を聖化する ために努力を傾けるように神は要求 なさいます。しかし、この招きを受 ける人達の年齢、職業、生活状況、 受けた教育などはかなり異なってい ます。このように様々な状況の違い があり、また特に結婚している人や 家族に関わる何らかの義務のある人 がいるので、「スーパー・ヌーメラ リー丨、「アソシエー卜丨、「ヌメ ラリー | のあり方の違いが理解でき ます。この名称は、センターの中、 或いは外から、オプス・デイが提供 する形成の手段を計画したり実行し たりする可能性の違いが反映された 結果ですが、召し出しの違いや個人 の献身の度合いの違いを意味するの ではありません。オプス・デイの信 者は全員が全力を傾けて同じ精神に 生きるように呼ばれていますし、

す

べての人が同じ聖性を目指すよう神 に召されているのです。

大部分のスーパー・ヌーメラリーは 結婚しています。そして友人や家 族、近所の人達や同僚の間で、言葉 と模範をもって福音宣教に力を尽く しています。他のオプス・デイの信 者同様、日常生活を通して聖性を求 めるというオプス・デイのメッセー ジを広げるように努めます。多様な 環境の中で、形成の手段に参加する 努力を続けています。家族と仕事へ の献身が要求されますから、スー パー・ヌーメラリーは、通常、組織 だった公的なやり方でオプス・デイ の活動を指導したり、オプス・デイ の精神について形成を与えたりする ための時間はほとんどありません。 しかし、彼らは言葉と模範で同僚や 友人、自分の家族をもっとキリスト に近づけるように努力すると同時 に、小教区の活動とオプス・デイの

活動を支えるために努めて経済的に 寛大な貢献をします。

ヌメラリーは使徒職のために心と体 の全てを神に捧げ、使徒的独身に生 きます。それゆえ、オプス・デイの 中で形成を与え指導的な仕事に携わ ることができます。ほとんどのヌメ ラリーはセンター以外の場で仕事 (職業)を持っていますが、もしオ プス・デイのディレクターとしての 什事に専念する必要があれば、エン ジニアやビジネスマン、弁護士など の職を手放して、フルタイムで形成 を与える仕事に快く従事します。形 成の手段を受けやすく、また、うま く進めていくために、普通の場合、 ヌメラリーはオプス・デイのセンター で家族生活をします。ただし、仕事 の必要上、別の場所に住むこともあ ります。

ヌメラリーは個人的に必要でない給 料と収入のすべてをオプス・デイの

女子のヌメラリーの中にアシスタント・ヌメラリーと呼ばれる人たち・いますが、彼女たちは、オプストでイのの家事全般を専門職といるといるで、その仕事は人いないます。その仕事はしばアシスを創り出しばアリーの仕事の大切されました。その仕事はオプ

ス・デイのセンターで行う使徒職が 実を結ぶために大きく貢献するから です。

アソシエートと称されるメンバーも 使徒職的独身を生きますが、血縁の 家族のための責任や個人的事情動に、オプス・デイの使徒のおりまずれるメラリーほど時間を割ります。と きない アンシェートは自分の家はは からしています。 収入に関しています。 収入に関しています。 収入に関しています。 収入に関しています。 収入に関しています。 収入に関います。

ヌメラリーとアソシエートの中から ごく少数のメンバーが、本人が自由 に望むならば、オプス・デイ属人区の 司祭として叙階の秘跡を受けるよ う、プレラートゥス(属人区長)か ら勧められます。この司祭たちはオ プス・デイに所属する信者の霊的な 面での世話を引き受けます。また、 説教や霊的指導、秘跡の執行などによって多様な使徒的活動を助けます。オプス・デイに属する約1900人の司祭は、全信徒メンバーの2パーセントにも及びません。

重要な個人的な約束ならいずれも同じですが、オプス・デイへの召し出しを軽く受け取るべきものではありません。創立者が話していたように、「全人生を決める決心は(…)

慌ててするべきではなく、落ち着いてすべきです。召し出しに関わる決心は、特に責任を持って思慮深くなされるべきです。賢明の徳の部分をなすのが他の人々、特に自らの両親の忠告を求めることです」(『エスクリバー師との会見』104)。

オプス・デイの『規約』には、オプ ス・デイのメンバーとなる人たちが 十分な知識をもって、よく考えた上 で決心するよう、明確な条項が記載 されています。オプス・デイに所属 するための契約を交わすためには18 歳になっていなければなりません。 それに先立つ一年半にわたってオプ ス・デイの使命と精神について詳し く学ぶと共に、オプス・デイの精神 に従って使徒職を実行しなければな りません。この最初の形成の時期 に、オプス・デイを内側から知り、 ディレクターが本人をよく知るよう になって初めて、最初の契約により

オプス・デイへの献身が許可されま す。

オプス・デイへのこの最初の契約は 1年足らず続くものです。最初の契 約から少なくも5年間は、毎年この 契約を自らの意志で更新していきま す。更新しなければ、契約は消滅し ます。オプス・デイにおいて神にし 生を捧げるには、正式に加入を願て 出たときから少なくとも6年半経て いなければなりません。ですからく 23歳になって初めてオプス・ディ の永続的な所属が可能になります。

第4章 教会におけるオプス・デイ

カトリック教会の一部であるオプス・デイは、創立者の言葉によれば、「教会が仕えて欲しいように教会に仕える」ことを求めます。オプス・デイでは、教会に仕えるだけではなく、とりわけ教会を愛するように、具体的には教皇と司教、司祭と修道者を愛するよう、その信者を励

まします。聖ホセマリアは「司祭や修道者の身分を最高の仕方で敬わなければ、神の教会を愛しているとは言えない」(『道』526)と教えていました。

属人区(プレラトゥーラ・ペルソ ナーリス)

教会法的に言えば、オプス・デイは 属人区です。第二バチカン公会議は 特別の使徒職を実践する新しい組織 として属人区を導入しました。教会 法典によると、属人区は聖座が与え る『規約』によって統治される位階 的な構造をもった組織です。属人区 長は固有の裁治権者として属人区を 統治し使徒的事業を推進するため に、司祭の叙階を受けるよう男子信 徒を招きます。属人区との契約に よって、信徒メンバーも同じ使徒職 を行うために牛涯を捧げます(『新 教会法典』295条、第1項と296条参 照)。オプス・デイ属人区は、1982 年、特別の司牧的な任務、すなわち すべての人が日常生活を通して聖性 追求に向かうべきであるという教え を広める使命を果たすために設置さ れました。

オプス・デイと司教区

オプス・デイは信者が教区と小教区 で受ける霊的指導を補う役目を果た します。世界的な広がりをもつ組織 としてのオプス・デイは、地方教会 に奉仕することによって普遍教会に 奉仕します。オプス・デイに属して も、自分の住む教区と小教区との関 係は変わりません。オプス・デイの 信徒メンバーは、自分の属する司教 区に関して、他のカトリック信者と 全く同じ義務と権利を持っていま す。全信者に及ぶ教区司教の統治権 はオプス・デイの信者にも及びま す。オプス・デイの属人区長と、司 牧面で属人区長の手助けをする司 祭、そしてオプス・ディの信徒であ

るディレクター達は、教区司教に よって築かれた基盤に基づいて行動 します。すなわち、神の民の聖化の ために尽力する司教の努力に呼応し て具体的で力強い貢献をします。

オプス・デイのメンバーは、自分の 小教区の牧者およびその信者に対し て兄弟としての協力をします。自ら の模範と祈りと言葉を通して、小教 区共同体の一致を深めるように努め ています。ですから中には、教区の

委員会その他の活動で積極的な役目 をする信者もいます。オプス・デイ の信者が小教区の活動に参加する度 合いは、個人的な状況や環境や好み によって大きく異なっています。し かし、いずれの場合でも、まず自ら の生活と什事の場で、祈りと犠牲、 言葉と模範によって、キリストが現 存なさるよう努力することにより、 地方教会の生活に貢献します。この ようにして 日々の生活で出会う人た ちをキリストにもっと近づけるよう に助けるのです。オプス・デイのメ ンバーのこの使徒職は、自分たちが 住んでいる教区と小教区に直接役に 立ちます。

オプス・デイとローマ教皇庁

世界的な広がりをもつ属人区として、オプス・デイは、ローマ教皇庁の司教省に依存しています。創立期から教皇と世界中の多数の司教の承

認と祝福、熱心な支持に恵まれてき ました。

ヨハネ・パウロ二世教皇は1982年11 月28日、オプス・デイを属人区として設立しました。教皇庁はその準備として詳細な調査を徹底的に行いる、聖座の関係各省で、オプス・デイの精神、その信者の生活様約』を詳細に検討し、審議しました。教皇はオプス・デイが使徒職活動を展開している国々(当時50ヵ国以上)の司教の意見を聴きました。

1992年5月17日に挙行された創立者 の列福式は、教会のオプス・デイ承 認を劇的に確認することとなりまし た。聖ペトロ広場に集う約25万人以 上の人々の中には、世界中から訪れ た33名の枢機卿と200名以上の司教 がいました。この人たちはホセマリ ア・エスクリバー師の帰天直後、教 皇パウロ六世に創立者の列福・列聖

調査の開始を願い出た1000人にのぼ る司教と枢機卿の一部でした。列福 式中、教皇ヨハネ・パウロ二世はこ う述べられました。「聖ホセマリア は、超自然的直観を持って、万人が 聖性と使徒職に召されていることを 倦むことなく説き続けました。キリ ストは、全ての人が日々の現実の生 活の中で聖人になるようにお望みな のです。従って、イエス・キリスト と一致して生きるなら、仕事もまた 個人的な聖性と使徒職の手段となり ます。なぜなら"神の御子キリスト は、受肉(託身)よって、何らかの 形で人間と被造物のあらゆる現実を ご自身に結びつけられたからで す"(ヨハネ・パウロ二世、回勅『聖 霊一生命の与え主』50参照)。物欲 が野放しになった社会では、モノが 偶像となって人の心を神から引き離 していますが、聖ホセマリアは、ま さに神と人間の努力が作り出したこ れらの現実が、創造主の栄光と兄弟 姉妹たちへの奉仕のために正しく用

いられるなら、全ての男女がキリストと出会うための道となることやめることなられました。"この世のあらめをものを、地上での儚い人間の活動をも含めて、神へと向かわせなけれい"(書簡1954年3月19日)。(『オッセージの今日性と超越性アののメッです。それは神がホセマリアの会とされたことからも分かります」(『オッセルバトーレ・ロマーノ』1992年5月18日と19日、p.4)。

列福式の翌日、感謝ミサに与るため に聖ペトロ広場に集まった多くの友力 プス・デイの信者とその家族や友は 達を前に、ヨハネ・パウロ二世と 話しになりました。「新しく聖と 記された皆さんが、人間の信 に支えられた皆さんが、人間の信 にわたる活動の世界で教会の信 と教えの使命に参加し、こいます 教の事業を推進してくださいま

一年後、ヨハネ・パウロ二世教皇は、次のように言われました。「オプス・デイ創立以来、65年の間にストデイ創立以来、65年の間になると信徒が決して分とにない一致を保ち、キリのより響かせることに大きであるがであるといました。この使徒職のこだを配しました。この使徒職のこだであるが、よびよびである私にまでのはます。オプス・デイ属人区の信

者の皆さんが、常に創立者を鼓舞した教会に仕える精神を忠実に保ち続けるよう、励ましたと思います」(『オッセルバトーレ・ロマーノ』1993年10月27日、英語版、43)。

第5章 家族の精神

家族としてのオプス・デイ

地上で過ごされた全生涯を通して、 イエスは愛の大切さを強調なさいま した。事実、自分の弟子であること の印は、互いに愛し合うことである (ヨハネ13.35参照)、と主はお教え になりました。キリスト者がお互い に愛し合うことは家族的な側面で す。主が明らかにおっしゃったよう に、私達はキリストにおいて兄弟で あり姉妹(ヨハネ13.35参照)だから です。神の子であることを生き生き と自覚することが、オプス・デイの 信者の霊的生活の支えとなり、命を 与える源ですから、信仰における兄 弟姉妹、何よりも同じ召し出しを持

つ人たちとしっかりと一致していた いと思うのは当然です。

オプス・デイの信者の霊的超自然的 絆は、何にもまして祈りと犠牲の行いに表れます。その上、オプス・デ イの信者は良いキリスト者の家族が 有する自然の愛情と相互の心遣いを 深めます。

オプス・デイの草創期、創立者は最初のメンバーを母親の家に集めていました、やがてそこは、家庭の合うはいを示した。 である、互い雰囲気のある場にするいった。 ない雰囲気が成したがないないであるが成のででであるが成りででででででいる。 ないないでででいましたが、とよ初のメンバーたちは、 でと最初のがでいましたが、とよいでででいましたがででででである。 ないましたが、とは、 でとようでではました。

オプス・デイのメンバーを一致させ、そのセンターの生活を特徴づける家庭の雰囲気は、見る人に強い印

象を与えることがしばしばありま す。聖ホセマリアの帰天直後、1940 年代の初頭に聴罪司祭であったホ セ・マリア・ラ・イゲラ(バレンシ ア司教)は、オプス・デイのメン バーではありませんでしたが、初期 のセンターの一つを訪問したことに ついて次のように書きました。「セ ンターに足を踏み入れたとたん、私 は、家族の雰囲気を共に味わうこと ができる喜びを感じました。とりわ け、私への信頼と親しさを持ってど の信者の方も接して下さり、とても うれしく思いました。そのセンター に住んでいる何人かの若い青年たち との出会いが心に残りました。そし て、皆に共通していた特長は快活さ でした。それは寛大な献身と犠牲を 恐れて逃げ腰になるどころか、喜ん で仕えたいという心意気から生まれ る魅力的で素晴らしい徳です」 (『神の人への証言』セプタープレ ス、1992年、パート1、p.21)。

オプス・デイのセンターでの家族生活:ヌメラリーとその血縁の家族と の関係

オプス・デイの信者は誰でもこの家 族の精神を持っていますが、とりわ けヌメラリーが生きている家族の精 神に目に留めてみましょう。最初の 形成が終了すると、所属時に住んで いた所がどこであったとしても、ほ とんどのヌメラリーはオプス・デイ のセンターで家族として共に暮らし ます。両親の家で家族と過ごしてい たように、センターで他のヌメラ リーと新たな家族生活をするので す。この新しい家族を築くことは、 ヌメラリーの親たちが、かつて結婚 の際に両親と別れて自分たちの新し い家庭を創り上げたのとまったく同 じことと言えるでしょう。

ヌメラリーは、オプス・デイの信者 の間で家族の愛情に満ちた場をつく るようにという神の呼びかけに応え ます。例えば、毎日夕食を共にし、一緒に楽しく語り合える時間を過ごすなど、家族としての愛情を育むのです。誕生日やオプス・デイの歴史の中で大切な記念日、そしてしっかりした絆で結ばれた信者の家族の人たちと同じように、それぞれの国の祭日や宗教上の祭日を祝います。

ヌメラリーは充実した日々を送って います。他の信者と同じように、オ プス・デイに所属する前にしていた のと同じ勉強、あるいは仕事に引き 続き従事しています。その上、自ら の内的生活を向上させ、キリストと 教会の教えを人々に伝えることがで きるよう、時間を割いて哲学と神学 を勉強しています。毎日のミサ、念 祷の時間、ロザリオと霊的読書など で、しっかりとした霊的生活を自ら 望んで送っています。そして、親戚 や友人、同僚との仲のよい付き合い を保ち、大切にしているのです。

兄弟姉妹を新たに得て、その愛情が 自分たちに注がれていることにも気 がつきます。自分の子どもたちの召 し出しを通して、親自身がオプス・ デイへの召し出しを受けることもし ばしば起こります。

ジョン・F・カバデイル

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/opusudeiheno-meshidashi/(2025/11/21)